

# [ちくほう地域研究] 張出し構造をもつ木橋について

筑豊地域研究会会員  
牛嶋 英俊

はじめに

近世から近代のはじめにかけて、河川にかかる木橋にテラス状の張出しをもつ例がある。確認された例は多くないが、絵画資料や写真を手がかりに、この特殊な構造の実態を考えてみたい。

## 1. 遠賀川・日の出橋の張出し

江戸時代、福岡藩の支藩・直方藩が廃藩後の元文元年（一七三六）以降、木屋瀬・飯塚宿間の長崎街道は往還替えがあり、当時の直方町頓野口で遠賀川を渡るようになった。『筑前名所図会』の「直方町」図には、旅人で賑わう渡し場のようにすが描かれている。

明治期、この場所にかかった橋が日の出橋であり、起工は明治四十五年（一九一）二月である。遠賀川流域でも最初期の大型木造橋で、長さ二〇四間（三六・七・二メートル）、幅二間（三・六メートル）の長大な橋であった。



図1-1. 初代日の出橋

もつとも、この初代日の出橋はながく維持されることはなかった。竣工後の十一年間に「前後十回に七千余円を投じて修繕」したが、「腐朽著しく遂に大正十二年（一九二三）に架け替わった」。

木造の橋とはいえ、ほぼ毎年修理をしながら短期間で腐朽するのはいぶかしく思われるが、この下流約三・五キロで大正五年（一九一六）に起工した中島橋（長二二〇間・幅二間）も十五年間に八回の修理をくり返し、これまた「腐朽甚く」昭和二年（一九二七）にかけ替えられた。当時、木橋の維持が困難であったことが知られる。

このように初代日の出橋は短命だったが、幸い鮮明な写真が残る（図1-1）。西岸の下流側からの撮影で、画面手前に舟遊びする少年たち、背景には福智山の山並みが見える。橋上には往来する人をはじめ、馬

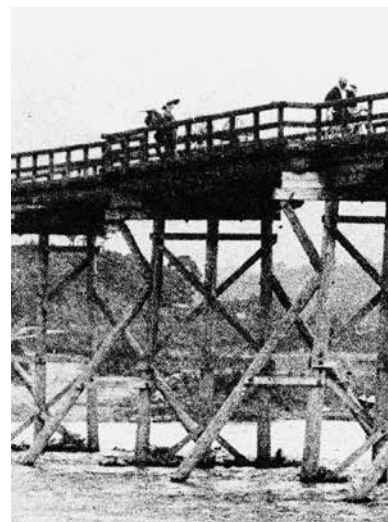


図1-2. 初代日の出橋の張出し

車や荷駄、大八車などが写る。

くわしく見ると、橋の西岸寄り下流側の高欄が外側に屈曲し、束柱9本分ほどの長さでテラス状に張出ししている（図1-2）。その規模は、通行人の大きさから推定して幅約一メートル強、長さ約五メートル、当時の尺貫法でいえば三尺×三間となろうか。

その構造は、橋梁に直交する台持木は他の橋柱（橋脚）部分と同じだが、張出し部分のみ橋柱頂部に渡した梁の一方をのばし、さらに二段の梁を重ねている。橋柱からは斜め上方に方杖が出てこの梁を支え、その上に張出しが乗る。先述のように高欄も張出しに沿って設けられるから、橋の上ではこの部分がテラス状に突出する形となる。いずれにせよ、明治末年に建造された日の出橋の、少なくとも一箇所に張出しがあったことが確認できる。

## 2. 近世の橋における類例

実在する著名な張出しの例に宇治橋（京都府宇治市）がある。大化二年（六四六）の架設を記す「宇治橋断碑」で知られる古代からの橋で、橋の上流側には



図2. 宇治橋三ノ間の張出し

橋姫を祀ったとされる「三ノ間」という張出しがあり、平成八年に架け替えられた現代の宇治橋にもその形が踏襲されている。(図2)

もともと、橋姫の神祠は洪水のたびに流失したので、のちに橋の西詰に移し祭ったとされるが、中世の絵巻や屏風に見える宇治橋にはこの張出しが描かれておらず、はたして橋上に神祠が存在したかについて疑問が示されている。<sup>(註5)</sup>

寛永十一年(一六三四)刊行の河口好和『諸国奇遊談』の挿絵には三ノ間に神祠が描かれているが、本文には方位を示す彫刻と鉄の鑲のみとある。図は実景ではなく、伝承を絵にしたものと思われる。

一方で、張出しは宇治川の水を汲むためとの説もある。事実、かつて茶の湯の世界では、宇治川の名水が珍重されており、永禄八年(一五六五)正月に松永久秀が多聞山城でおこなった茶会では「御水ハ宇治川三ノ間ノ名水」(『松屋会記』)であった。また天正八年(一五八〇)の津田宗及の自会記には「水 三間之水 従宮内法贈給候」とある。今日でも三ノ間の直下は

流れの中心で比重が軽く、かつてそこに流れる水はとくに甘美であったという。貞享元年(一六八四)刊行の北村季吟『菟芸泥赴』には

「三ノ間の水は、此川の中に此所ことに茶に甘美なりと利休おぼして、水くむ所を橋にかまへたり」として、三ノ間の張出しは名水を汲むために利休が工夫した施設と説いている。

もともと、さきの『諸国奇遊談』には三ノ間の張出しについて

「通行人の休憩のためなら橋の中央付近にあるべきだ。往來の人を避ける必要があるような小橋でもない。水を汲み上げるのなら橋の下流側にあるべきだし、むしろ舟で汲んだ方が便利だろう」と疑問を呈している。<sup>(註6)</sup>

一方、江戸時代に東海道一の橋として知られていた矢矧橋(愛知県岡崎市)には、橋の二カ所に張出しがあった。文政九年(一八二六)、ドイツ人医師シーボルトが江戸参府に随行したとき、矢矧橋について「日本最大の橋」と関心を示し、みずから長さ幅を記録

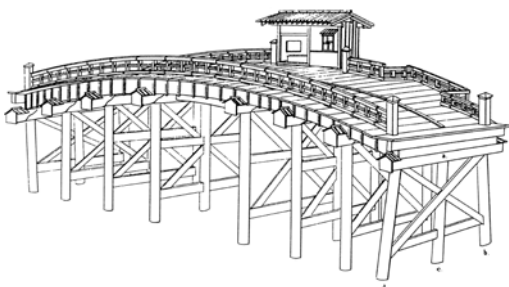


図3. 矢矧橋の張出し

している。<sup>(註6)</sup> また橋のスケッチを作成し、長崎の画家川原慶賀に橋を精細に描かせた。さらに日本人工に橋の模型までを作らせている。(図3) これらによると、

矢矧橋には上流側に二カ所の張出しがあり、橋の中央の張出しには小屋が設けられていたことが知られる。

橋中央付近の小屋については、これよりはやく寛政七年(一七九五)の髙力猿猴庵『東街便覧図略』にも見える。説明には

「海道第一の大橋にて、橋の真中に番所(南有)有。西の詰には突棒・指股等を飾る。両の川岸には策を結び、云々」

とあり、張出しが番所設置のためと知られる。また寛政九年(一七九七)の秋里離島編『東海道名所図会』にも図があり、橋中央の番所とここに詰める人物が見える。

東海道は軍事上の理由で架橋が制限されていたが、矢矧橋は例外的に長大な橋がかかっていた。これは橋の東が徳川家とゆかりの深い岡崎城下であったため、参観交代の諸大名などに威厳を示す意味があったよう

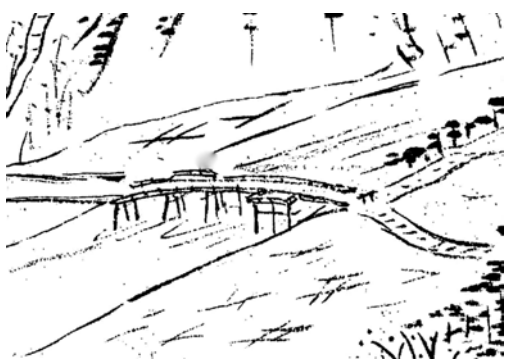


図4. 室見川の橋

表1. 『筑前名所図会』の主要な橋一覧

類型	名称(仮称ふくむ)	郡	街道	場所	川	図の名	橋脚数	張出し	取付位置	規模など
1	黒門橋	福岡	唐津		黒門川		3			反り橋・長5間5尺幅2間1尺3寸「古地図の中の福岡・博多」
1	梁橋	福岡			菰川		3			反り橋・唐人町と西町の間
1	白水橋	總波	長崎	飯塚宿	飯塚川	飯塚駅	3			反り橋「全誌」に長25間幅21間
1	高橋口の橋	御笠	宰府	宰府宿構口前	御笠川	西都図第二	3			反り橋
1	石堂橋	博多	唐津		御笠川		6			反り橋・長24間4尺5寸幅2間4尺
1	中島東橋	博多	唐津		博多川	中島東西の橋	7			反り橋・25間(石城誌)28間(筑陽記)
1	中島西橋	博多	唐津		那珂川	博多惣細図	3+			反り橋・43間半(筑陽記)
1	伊野神社前の橋(現五十鈴橋)	粕屋		伊野神社前	猪野川	伊野太神内宮之図	3			反り橋
2	一貴山川の橋(長)(現羅漢橋)	怡土	唐津		一貴山川	深江駅・天満宮他	5	1	上流	小橋と連結
2	興徳寺橋	早良	唐津		長柄川	興国寺・姪浜	2			反り橋
2	赤坂橋	志摩	唐津	岩本付近	長野川	筑紫富士	3			
2	栗尾明神前の橋	下座		三奈木村	佐田川	栗尾明神	2			
2	住吉橋	那珂			那珂川	住吉神社一の鳥居	7	1	上流	石垣突出 反り橋
2	作出町の橋	博多		日田街道そば	御笠川	作出町	不明	1		一部のみ描く
2	若宮明神前の橋	福岡		薬院八反田	堀か					一部欠。今泉1丁目
2	米田橋	福岡			菰川		2+			唐人町と西町の間
2	関屋追分の橋	御笠		関屋追分そば	御笠川	西都図第四	2			かなり省略・橋脚は3本か
2	室見川の橋・底本図	早良	唐津	室見河口	室見川	愛宕山	6?	2	上下流各1	
2	室見川の橋・異本図	早良	唐津	室見河口	室見川	愛宕山	4?	2	上下流各1	
2	半路橋(現山王橋?)	那珂			御笠川	比恵山王社半路橋	3			日田街道そば
2	鏡天神前の橋	博多		鏡天神の西	博多川	鏡天神社・綱輪天神社				
2	作人橋	博多		大東寺・川端町	博多川		4	2		博多惣細図では上下に張出し
2	西門橋	博多	太閤道		御笠川	博多惣細図	不明	1?	上流	「全誌」に長35.7間、幅0.5間
2	西門橋	博多	太閤道		御笠川	幻住庵他	3+			一部のみ描く
3	飛石橋上流の橋	早良	唐津		金屑川	藤崎口	2			反り橋
3	管弦橋	那珂				吉祥女社・管弦橋	2			
3	裂田溝の橋	那珂				安徳天皇古跡他	2			
3	内野宿の橋	總波	長崎			内野宿根智山	2?			
3	八反田舟場の橋	嘉麻			「芦屋川上流」	八反田舟場秋月蔵屋敷	3			横に小橋あり
3	長谷山の橋	夜須			小石原川	秋月	2			
3	礼拝橋	下座				伝教大師礼拝	2			
3	二又瀬の橋	粕屋			宇美川	二又瀬	3			
3	大橋(現多々良大橋)	糟屋	唐津	多々良河口	多々良川	多々良浜古戦場	5			反り橋
3	多々良大橋南の橋	糟屋	唐津	多々良河口	多々良新川	多々良浜古戦場	3			
3	神の前橋(水分宮前の橋)	粕屋			猪野川	伊野大神内宮	3			反り橋
4	一貴山川の橋(短)	怡土	唐津		一貴山川	深江駅・天満宮他	1			大橋と連結
4	千手宿北構口の橋(現本町橋)	嘉麻	長崎		千手川	千手駅	2			反り橋
4	千手宿南構口の橋(現横町橋)	嘉麻	長崎		横町川	千手駅	2+?			反り橋
4	高倉神社下の橋	遠賀		高倉神社			2			
4	香椎宮下の橋	糟屋		香椎宮下		香椎宮				

「筑紫名所図絵」の橋の分類模式図	
種類	図
1類	
2類	
3類	
4類	

表2. 『筑前名所図会』の橋の類型模式図

だ。長大な橋の中ほどに番所が設けられたのは、往来警備のためと思われる。猿猴庵が見た橋の西詰の突棒・指股は捕物道具であるから、これも警備の一環である。

3. 『筑前名所図会』にみる張出しの諸例

近世筑前における木橋の張出しは『筑前名所図会』に見られる。「巻之三」収録の「愛宕山」図には早良郡室見川の橋が描かれているが、(図4)橋の両側に一對の張出しが見える。

これについては西日本新聞社版『筑前名所図会』の解説に指摘があり、公刊された底本の描写は簡略であるとして異本の挿絵を掲げている。張出しが設けられた理由については、「交通の為の特殊な施設」と述べるにとどまる。

「解説」が指摘する橋の張出しは室見橋だけだが、同書にはほかにも張出しを表現する橋があり、その「特殊」の内容に関心がもたれる。

『筑前名所図会』（以下、『図会』）は博多の商人奥村玉蘭の手になる筑前の地誌で、本文に付して筑前各地の情景が多数収録されている。文政四年（一八一二）に藩庁に浄書を献上して出版を願ったが、許可を得ることはなく、百五十余年をへて西日本新聞社から『奥村玉蘭 筑前名所図会』として刊行された。

不許可の理由は不明だが、図が写実にすぎ、藩の機密にふれるところがあつた可能性が指摘されている。このような推測がなされるように、『図会』所載の、とくに町並みや風景の図は詳細精緻であり、本文の記述を補完する意図が見て取れる。歴史資料として、他の絵画類と一線を画するゆえんである。

表に『図会』に描かれた橋の一覧を掲げた。（表1）描かれたすべての橋ではなく、遠景など簡略に描かれたものや、寺社境内の儀礼的なもの、ごく小規模で橋脚をもたない小橋などは除外し、規模構造が比較的明確なものに限った。その結果、大まかに四種類となった。（表2）橋の名称については、おなじ場所にあつても今日では橋名がかわっている場合があり、橋名自体が不明なこともある。その場合は「〇〇前の橋」など、「」つきで位置を示した。

1類は両側に高欄をもち、擬宝珠状の飾りをもつ。昔の木橋としてイメージされる橋である。橋脚も三本から七本表現されているが、一般に描かれた橋脚の数が正確でないことにはすでに指摘があり、これは『図会』にもあてはまる。したがって、ここでは実数ではなく、相対的な目安として扱う。

このグループは橋長は長く、橋幅も広い傾向がある。いずれも橋全体が反りをもつて表現され、八例中六例が福岡・博多地域に集中する。地方では主要な宿駅（大宰府五条口・飯塚宿）や神社の参詣道など、威儀を示すべき場所にかかる。

2類は装飾性がなく、低い高欄のみのいわゆる桁橋である。反りのあるものもないものがある。橋脚は住吉橋の七本を例外として、他は二本から五本の間にある。換言すれば、1類より橋長が短い傾向にあり、橋長に対して幅が狭いのが特徴である。十一例中、張出しつきが五例あり、張出しをもつ橋はこのグループに限られる。福岡・博多の町なかの道すじや、福博以外では唐津街道など交通量の多い周縁地区にかかる。

3類はいわゆる土橋である。橋桁をならべた上に敷土したもので、高欄はなく、反りをもつて描かれることが多い。九例中、橋脚は二本から三本と小規模な橋だが、五本をもつ多々良川の大橋のような例外もある。福博からはなれた周辺地域に多い。街道上にあつても、辺鄙な宿駅にみられる。

4類は以上に属さないその他の小橋を一括した。これらを概観すれば、当時の橋はそれがかかる場所により、規模形態において社会的な階級性を示していたことが知られる。

#### 4. 「張出し」の機能について

以上を通じ、『筑前名所図会』における橋の張出しは五例あり、いずれも2類の橋に限られることを見た。設置箇所は、両側に張出しのある「室見川の橋」と作人橋（川端町図）では一ヶ所だが「博多惣細図」には両側にある）をのぞき、いずれも橋の中央部の上流側にある。これを「室見川の橋」では橋脚とはべつに三本、「作出町の橋」では二本の柱で支え、柱の上部を貫で連ねている。橋と張出しが一体的な構造であるのが知られる。

その規模は「室見川の橋」では長さは橋幅より大きく、張出し幅は橋幅の半分程度に描かれている。「作手町の橋」図は簡略だが、張出し長は橋幅と同じくらい

にみえる。両者とも橋の本体からつながる高欄がある。それでは、これら橋の張出しは何のために設けられたのだろうか。

近代では明治四十二年（一九〇九）架橋の大坂心齋橋や昭和八年架橋の福岡市名島橋など、石橋やコンクリート橋にバルコニー風の張出しがあるが、これらは西洋の橋の意匠を模したものである。昭和十二年にかけ替わった松江大橋（島根県）も同様で、コンクリート橋ながら木橋風の高欄・擬宝珠をもち、橋の中ほどに長さ二〇メートル、幅一・四メートルの張出しがあるが、展望台としてあらたに設けられたものである。<sup>(註10)</sup>

また、福岡県下では昭和三年（一九二八）架橋のコンクリート橋芳雄橋（飯塚市）には橋の中ほどの両側に張出しがあつたが、これは川の中島に降りる階段が計画変更で中止された名残りである。これら諸例からみて、近代の石橋やコンクリート橋における張出し・バルコニーは、木橋における張出しとは系譜関係をもたないように思われる。

木橋に立ち戻ると、さきを示した分類で、張出しは2類の橋に限られることをみた。2類の立地の特徴は、都市部や交通量の多い場所の比較的幅の広い川に架かることである。福博の町なかのほか、周辺地域でも主要な街道上に多く、かつ1類ほどには格式や装飾性が求められない立地にある。

形態的な特徴は、橋長にくらべて幅が狭いことである。1類のうち、福岡・博多の橋は長さにかかわらず橋幅が二間から三間ある。これに対し、2類はいずれも橋幅が狭く描かれている。実際、御笠川にかかる西門橋は、明治初期に長さ三十五・七間あつたが、幅は半間にすぎなかった。（『福岡県地理誌全誌』）また高欄を欠くものも多く、最低限の実用性をもつ橋であつた。

このことから推定される張出しの機能は、往来する

人のすれ違いの空間確保である。通行が頻繁で一定の長さがありながら、幅がせまきちんとした高欄もない橋では、人のすれ違いに危険が伴う。これに対処するための「待機場所」として設けられたのが張出しと考えられよう。通行の安全確保には橋幅の拡張と高欄の設置で対応が可能だが、そこまでの整備をせずに対症療法的に工夫されたのが張出しであった。さきに三ノ間の張出しについて、『諸国奇遊談』がいみじくも「往來の人の立とどまるべき為ならば中程にあるべきに」と述べているのは、作者河口好和の思いつきではなく、当時そのような施設が実在したことを踏まえたものと理解できる。

福博の張出しの出現がいつの頃かは手がかりはないが、その発想と技術は、矢矧橋や宇治橋にまでさかのぼる可能性がある。

あらためて日の出橋の写真を仔細に見る。笠をかぶった二人の人物が張出しの高欄にもたれており、かたわらには大八車がある。おそらく彼らは車引きであり、たまたま川風にあたって一服している風情に見える。張出しにはこのような使われ方もあったのである。

そのように思えば、さきに述べた初期の西洋風の橋にバルコニーや展望台が設けられたことは、たんに西洋の形式のみを模倣したのではなく、その背景に近世以来の木橋の張出しの存在とその記憶があった可能性を考えてよいかと思われる。

(うしじま えいしゅん)

## 註

註1 『奥村玉蘭 筑前名所図会』刊本に西日本新聞社一九七〇年がある。

註2 鞍手郡教育会編『鞍手郡誌』一九三四年

註3 絵葉書「直方名所・日の出橋」井上ビイナス堂

註4 「宇治郷 習俗と伝承」『宇治市史6』一九八一年

註5 「往來の人の立とどまるべき為ならば中程にあるべきに、西のかたによりたるもいぶかし。又人の往來をよくるほどの小き橋にもあらず。或は豊臣家の御とき、茶の水をここより汲上しといふ。さらば釣瓶を下して便あるは、川下なるべきに、川上にあるもなをいぶかし。扱、茶の水に此あたりよきならば、橋のうへより汲あぐるよりは、舟してくまば持行にも便よかるべし」『茶業の発展と茶師』『宇治市史2』一九八六年

註6 「長さは私の見積りだと九三〇バリ・フィート、日本人の言うところでは二〇八間。幅はただざっと見積もって三〇フィートある」シーボルト「江戸参府紀行」東洋文庫 一九六七年ほか

註7 檜垣元吉『筑前名所図会』の成立 註1文献

註8 鈴木里生「江戸の橋」角川学芸出版 二〇〇八年

註9 上人橋は底本と異本で橋脚の数の差が大きすぎ、除外した

註10 内田兼四郎『松江大橋物語』一九七五年